

小 さ き 声

No.150

1975.2.15

〒189 東京都東村山市青葉町4-1-10

多磨全生園 松本馨

マグダラのマリヤ

イエスのエルサレムに同行した二つの群があった。一つはペテロに依って代表される使徒達であり、もう一つは、マリヤに依って代表される女性達である。この二つの群は、イエスが極刑された時、対照的な行動をとった。女性達は遠くから主の極刑を見守っていたが、それは、自分の身を切り裂かれる痛みと深い悲しみの中で、主の最後を見守っていた。

世にこれ程痛ましく、絶望的なそして感動的なものは無い。何故なら、それは人間の極限状況に置かれた主を愛する女たちの姿だからである。

これに反して、使徒達はイエスを捨てて逃げ去り、自分の身に危害が及ぶのを恐れ、中から固く戸を閉じて一個所に隠れひそんでいた。その中には、イエスを「キリスト」と告白したペテロもいる。

この両者の代表的人物は、女性ではマグダラのマリヤであり、男性はペテロである。ヨハネに依る福音書20章に、この両者が際立った姿で登場してくる。「さて1週の初めの日に、朝早くまだ暗い中に、マグダラ

のマリヤが墓に行くと、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで走って、シモン・ペテロと、イエスが愛しておられたもう一人の弟子の所へ行って、彼らに言った。『だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたかわかりません。』そこでペテロともう一人の弟子は出かけて、墓に向って行った。空虚な墓に対するマリヤとペテロは著しい対照をなしている。ペテロは空虚な墓を確認しただけで、その場から去って行った。マリヤは、一人後に残り、誰か主を取り去ってしまったと泣き悲しんでいた。このマリヤの心情を思うとき、心に痛みを覚える。

マリヤも使徒達と同じようにイエスを慕っていたであろう。その主イエス・キリストが、思いもかけない極刑に処せられたのである。神の子キリストが十字架にかけられ、二人の強盗と共に民衆の晒しものにされたのである。これ程絶望的な、悲惨な出来事があるだろうか。使徒達でなくとも躓かない者があるだろうか。にも拘わらず女達は、イエスの最後を見守り、1週の初めの日に墓を尋ねているのである。深い悲しみと絶望の中から、恐らくイエスを神

の子として信じられない状況の中で、墓に葬られたイエスを慕い尋ねているのである。墓の中まで慕い行く信仰は何であろうか。それはイエスを神の子として信ずる信仰だろうか、それとも師弟の情愛であろうか。生前のイエスに依って救われた恩人に対する思慕であろうか。それらはいずれも推測の域を出ないが、はっきりしていることは、十字架にかけられたイエスを墓まで慕って行ったことである。そのマリヤに深く教えられるのである。

現代は神無き世界であり、現実の日本に何等かの意味で絶望していない者はないであろう。混迷と頹廢を続けている現代に希望らしいものはない。聖書的に言えばイエスが墓に葬られ、暗黒の時代なのである。偽キリストに偽預言者が横行する時代である。こう言う時代である。キリスト抹殺論が流行している時代である。こういう時代にあって、求められるのはマリヤの信仰である。キリストとしては、到底信じられない状況の中にあって、墓にまで求めて行く信仰である。それは、神無くして神の前に立つ信仰である。神に絶望しつつ神を求める信仰である。

勿論、私はマリヤの行為を奨励しているのではない。唯現代の私達に欠けているものをマリヤに学ばなければならない。それは到底信じられないイエスを慕って行く信仰である。そこに「マリヤよ」という復活のキ

リストの声を聞くことが出来るのである。

或る友へ

1月24日

苦難の意義について、その時々状況に応じて、聖書は苦難について解答しています。詩篇記者は、この問題を正面から取り上げています。然し、その代表的なものは、ヨブ記でしょう。義人が苦しみ、悪人が栄えるというのは、ヨブの主題です。

イザヤ53章の苦難の僕は正しい者が、罪人に代って苦しむ姿を画いたものです。その指し示しているものは、イエスの十字架でありましょう。さて之等の事を念頭において、苦難に対する私の考えを述べてみたいと思います。私は、苦難そのものは無意味そのものだと思っています。無意味だから苦しいであり、苦難が絶望的なのです。苦難の原因に就いては創世記のエデンの園が明解に教えています。それは、アダムとエバが神に反逆しエデンの園を追放された事に有ります。そこでは苦難が罰としてアダムとエバに臨んでいます。つまり神との断絶が苦難そのものなのです。人はその罪の故に神との断絶を知りません。それ故に、苦悩のおこる原因についても理解出来ません。解るのは、苦難の無意味性、絶望性だけです。

然し聖書は苦難を試みとして、或

いは恵みとして、或いは審判として記しています。それは何故でしょうか、苦悩そのものが無意味であるとするれば、その様な考えは間違っている様に思われます。然し聖書は、苦悩を苦悩そのものとして問題にしています。信仰の光に照す時、苦難は恵みであり、試練であり、審判なのです。ロマ書5章1節以下は、この間の消息を語っていると言ってよいでしょう。

この様に私達は、信仰によって義とされたのだから、私達の主イエスキリストにより、神に対して平和を得ている。私達は更に彼により、今、立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。それだけでなく艱難をも喜んでいる。なぜなら艱難は忍耐を産み出し、忍耐は錬達を産み出し、錬達は希望を産み出す事を知っているからである。そして希望は失望に終ることはない。なぜなら、私達に賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

苦難の無意味性に絶望し、自己を死に追いやる事も、信仰に依り恵みとして受けとる事も総て人間の側の責任です。神に何の責任もありません。私は1935年全生園に入園しました。今年で40年になります。発病したのはそれより2年早く、15才の時です。思えば私は癩のために生れ癩のために苦しむために生を

受けたといえましょう。40年を振返る時、社会復帰のチャンスが私にもありました。それは治療薬の出現によって癩と隔離から解放される時が到来した時期でした。1947年から50年の時期です。然し私はこの時期に癩と隔離から解放された代償として、失明と四肢の麻痺という暗黒と無感覚のとりこことされてしまいました。世に之程無惨、無情、無慈悲、冷酷な出来事があるのでしょうか。若し神があるならば、その神は悪魔としか考えられません。それ程に、私にとって絶望的な出来事でありました。

然し之は信仰なく、全くこの世的な基準で計る時そうなのです。けれども今立つ処の信仰により、恵みに依り40年間を振返る時、それは恵みの一語に尽きます。過去40年の苦難も癩も、隔離も失明も、四肢の無感覚も私を奴隷にする事は出来ません。キリスト・イエスにあるものを罪に定める事が出来ないからです。キリスト・イエスにある生命の御霊は、私を罪と死から解放したからです。つまり之等のものから解放したからです。解放しただけでなく、之等のものを私の武器とし世と戦う力を与えてくれたからです。この事は誇張でもなく、欺瞞でもありません。失明によって完全に、この世的に死んだ所から私の生は始まっています。それは、失明によってイエスと共に死に、イエスと共に生きたからです。

彼が私の義となり、生となったからです。それは、私自身、信じられない位の出来事であり、不思議なことがおこりました。人間的にはまったくの不可能であり、全くの絶望的な状況の中でおこりました。それは、パンフレット伝道であり、自治活動なのです。

友よ、私は私自身を誇るために書いているのではありませんが、ハンセン病療養所の中に、10年以上パンフレットを毎月発行した者がいるのでしょうか。失明者で自治会長をしている者がいるのでしょうか。そのどちらを取っても健康と大なる智慧を以てしても、容易には実現出来ない事です。それ程苦しむ事なく続けて来ました。私はこの外にも、若し必要とする事があれば起してもよいと思っています。私に不可能はなく、総てが可能に思われるのです。之は私ではなく、キリストが私の内にあって働いているからでしょう。私は苦難というものは、無意味そのものではあるが、信仰に依って受け止める時、それは恵みなのである、と信じます。然し苦しんでいる者に向って、軽率に言うべきでない事は言うまでもありません。苦しみは、キリスト者にとっては試練であり、それを恵みとするか、絶望とするかは、その人の責任です。私達は、彼のために祈る外はありません。十字架上のイエスは、私達のために、神にとりなしているのであれば、私達

にも祈ることは出来る筈です。

無教会 1月30日

無教会は、一人信仰に立つ自主独立の精神がなければついて行けない、というより自主独立の精神を授けられるのである。

無教会は、総てのものに対して完全に自由である。

これから書くことは、私の無教会観である。

私が無教会に深く同感するのは、聖書を学ぶ上で、何等の制約も条件もなく、自由に読む事がゆるされている事である。この一点に関する限り、カトリックも、プロテスタントも自由である。ルターは聖書をバチカンから民衆の手に渡した革命児であるが、無教会で、聖書を日本の民衆に渡したその先駆的役割を果たしたのは内村である。私が無教会になって何時も思う事は、聖書を自由に読む事がゆるされている事である。この事は、教会にもゆるされているかも知れないが、本質に於て違うのである。例えば本誌であるが、13年も発行出来たのは、聖書を自由に読む事がゆるされているからである。過去12年の内には、教会には全く入れられない様な大胆な事を書いたが、それも無教会なるが故にゆるされて来たのである。若し教会者であったなら私は教会から追放されていたであろうし、発行禁止を強され

たであろう。

即ち、次の様な事なのである。無教会には救いのために必要な条件は何もない。洗礼も、聖餐も必要としない。イエスキリストを信ずる信仰のみによって義とされるのである。カトリックから洗礼を切り離して考える事は出来ない。 sacrament は、救いの絶対条件である。プロテスタントは、カトリック程ではないが、sacrament を抜きに教会を考えることは出来ない。

聖書は多義であり、sacrament について種々の解釈が生れる。然し、聖書の根底にあるものは何か、その中心部をなすものは何か、その一点から聖書は読まなければならないし、探求しなければならない。それが私は無教会の信仰の生れた所以だと思う。この様な事が大胆に書けるのは、無教会の恩恵なのである。

誤解を恐れずに書くならば、私はイエスの復活を信じないキリスト者も又、キリスト者だと信じている。現代の若い世代はこうした信者が多いのではないだろうか。教会は洗礼と同じ様に復活を信じない者を受け入れる事は出来ないだろう。勿論、私は復活を信じない信徒を正当だと信じている訳ではない。私が言いたい事は、復活を信じない者が、救われるか、救われないかは、神の審判にゆだねればよいのである。人間の側で、決めつける事はゆるされないと言う事である。私は又無教会者は

信仰に於て自由であるだけでなく、それ故に政治活動も文学活動も、その他この世のいかなる職業に従事する事も自由である。キリストの死と生に会わされているものは、この世の事業に対して大なる力を発揮するだろう。それは、この世界を創造し支配し給う神の力をこの世の中に、現す事になるからである。時間の中に永遠を持ち込むことになるからである。この世の事柄に神の事柄を持ち込むことになるからである。この世の事業に携り乍ら、そこにキリスト者としての智慧と力が顕示されないとすれば、信仰に問題があるのではないだろうか。そして、このことが可能なのは、私は無教会ではないかと信じている。何故なら、総てのものに対して自由だからである。この自由は、キリスト者の自由であり、いのちである。私は無教会に対してこのような信仰を与えられている。

療養通信

1月は4日より復活行動で忙しい正月を迎えましたが、2月は自治会役員の選挙です。

私は1975年の施設整備を考えると、例年になく心が重くなります。治療薬の整備予算は2億円以上を必要とし、居住の予算も1億円は必要とします。それだけの予算が取れないことははっきりしており、その時の園内の騒ぎを想像するとき、

気分が重くなるのです。

本誌1月号の「或る友へ」に書いたようなことが、起らないとは断言出来ないからです。会員の私に対する期待が大きくなればなる程、予算が思った程に取れなかった時の失望は、期待に反比例して大きなものとなるからです。

しかし、事ここにいたって退くことは出来ないし、総てを神にゆだねて、そのご意志に従う外はありません。神は必要とするならば私をいかなる困難、迫害の中にも遣わすことになるでしょう。全生園における私の使命が終ったと判断するならば、この世界から私を取り去って下さることでしょう。後を振向くことなく、前のものに向かって進むだけです。

それは、私にとって最もよしとすることを神はなさって下さるでしょう。

今年は、反キリスト者の書いたものを学んでみたいと思っています。それは、聖書を客観的に、そして、より深く学びたいと思うからです。イエスが取税人、罪人の位置に立たれたように、神なきこの世界の唯中に立たなければなりません。徹底的に不信仰の世界、罪の世界に立たなければ、十字架のイエスは判らないでしょう。イエスだけが、神なき世界の唯中に立たれているからです。

私は思うのですが、この世界に対してもっと大胆に、そして自由に、不信と罪を恐れず入って行くべきで

はないか、そのことが信仰的に問題になっている限り、ボンヘッファーの言われるような成人した世界とは言えないでしょう。

1月号の「神の言を喰う」と「或る友へ」は、反響がありました。具体的なキリスト者としての戦いに、教えられ、励まされるという内容のものが多くありました。戦いの厳しさを示されたと言うお手紙もありました。私自身は、厳しい戦いをしていとは思っていません。キリスト者として、誠実に自治活動に取り組んでいるに過ぎません。そして、その活動を通して、自己の不信を思い知らされています。1月号の「或る友へ」の夢の中で発した「人殺し、助けて」は私を震憾させました。

過去25年間、私は神の言を喰って生きて来ました。神の言に飢えるとき、呼吸難に陥るほど、血肉となっていた筈なのに、死の前に立たされたとき、私は神を見失い、あの叫びを発したのです。このことは私にとって神の言が血肉となっていなかったことを意味します。結局私は異邦人にすぎなかったのです。いかに聖書を喰っても、私は異邦人なのです。それは徹底的に不信者であるということです。そうした中より、今の私は十字架を仰ぐことができません。